

縄文時代の大規模集落遺跡群

発掘速報
【考古】

わっかおい —若生2遺跡—の発掘調査

伊達市噴火湾文化研究所 永谷 幸人

1. 貝塚が密集する大規模遺跡群

2019年に発掘調査を実施した若生2遺跡は、国道37号線の若生バス停付近に位置する、縄文時代中頃（約5,000年前）の集落遺跡です。

遺跡は海岸線から約700m内陸の丘陵上にあります。この丘陵は、遺跡の北側に位置する有珠山が山崩れを起こした際に流れ出した土砂や岩石を基盤としているため、周囲には巨石が転々と露出し、起伏に富んだ地形を形成しています。

遺跡の北東400mの地点には、若生という地名の語源（アイヌ語の「wakka-o-i=水・ある・処」）となっている湧水点があります。この湧水点を中心とする6つの地点に貝塚が分布する大規模な集落遺跡群（若生貝塚と若生2遺跡）として知られており、若生2遺跡はその中のC・D地点に該当します。

2. 若生遺跡群の調査・研究史

若生遺跡群での最初の調査は、1920年頃にニール・ゴードン・マンロー（スコットランド出身の考古学者）が行った現地調査と遺物採集であるとされます。

1950年には、^{みねやまいわお}峰山巖教諭率いる伊達高校郷土研究部員によって4箇所の貝塚（A～D地点）が発見されました。その後、同研究部と北海道大学助教授（当時）の名取武光氏によってA地点の発掘調査が行われ、貝層の厚さが3mにもおよぶ縄文時代前期（約6,000年前）の道内最大級の貝塚が良好な状態で保存されていることが明らかにされました。

以後、発掘調査は行われてきませんでした。1999年に土地所有者が畑地の巨石を除去した際に貝塚が露出したとの連絡を受けた市教育委員会によって、遺物の回収作業が行われ、新たにE地点の貝塚が発見されました。

2014～2016年には、伊達市噴火湾文化研究所による科研費研究「噴火湾沿岸の縄文文化の基礎的研究（基盤研究（B））」（研究代表者：青野友哉）による発掘調査が実施され、A・E地点の貝層のブロックサンプル採取及び分析が行われたほか、分布調査によって新たにF地点の貝塚や竪穴住居や墓といった集落を構成する遺構が発見されています。



3. 2019年調査の成果

今回の発掘調査は、市の下水道新設工事に伴い実施されたもので、国道に沿った幅約1.5m、長さ約190mの範囲を調査しました。

その結果、以下の遺構が検出されました。



若生2遺跡全景

①貝塚

厚さ約60cmの貝塚が検出されました。貝塚の上部は国道改良工事などによって破壊されていましたが、下部は良好な状態で保存されています。貝塚が作られた時期は縄文中期後半（約4,500年前）とみられます。貝類のアサリやオキシジミが多くみられましたが、魚骨や哺乳類の骨は少ないようです。



貝塚

②獣骨集中

貝塚の下から、哺乳類の骨がまとまって出土しました。大半がエゾシカで、頭の骨の数から、少なくとも2個体分が含まれています。集中の範囲が後述する竪穴住居の跡に重なることから、竪穴住居跡の窪みにまとめて廃棄されたものと考えられます。



獣骨集中調査風景

③竪穴住居跡

貝塚や獣骨集中の下から、竪穴住居跡が検出されました。調査区の幅が狭いため、全体の構造は把握できませんでしたが、平面形は楕円形か卵型とみられ、壁に近いところから柱の跡が3つ検出されています。床面や覆土の中から遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明ですが縄文時代前期に作られたと考えられます。

この住居跡で注目されるのは、床面から多量の炭化材が出土したことです。住居を使わなくなった時に、壁や屋根の部材を取り外して竪穴の中に集めて燃やした可能性があります。



竪穴住居跡

このほかにも石で囲んだ炉の跡や、土器など多くの遺物が出土しました。こうしたことから、調査区を含む一帯に縄文時代中期の集落が広がっていたと考えられます。

これまで本遺跡は、国道の改良工事の際に大部分が破壊されたとみられていましたが、思いのほか遺跡の残り具合が良いことが分かりました。今回の調査範囲は狭く小さなものでしたが、今後の調査でさらに多くの発見があるかもしれません。その時まで遺跡を大切に守っていきたいと思います。